

2006年8月23日発行

ぷろす

四季の会・ユーザーズ・サービス

213号

発行人 浅沼 邦夫

拝啓 残暑の候、先生におかれましては益々御健勝のことと存じます。

日本全国のお盆様、一般的には8月13～16日は休みが多いです。この時期に高校野球がある。TVにくぎづけされる人も多かった。今年**は早稲田実業が優勝した**。第1回の全国中等学校大会は、1915年(大正4年)に大阪、豊中グランド(甲子園球場がなかった)で全国大会は代表10校で行われた。その10校の中に早稲田実業の名がある。準決勝で敗退した。

今年の夏の第88回大会、「88回待ちました」優勝した早実の和泉監督がそう言った。王貞治投手の活躍や、荒木大輔投手の力投を覚えている世代には、ちょっと意外だが夏の優勝は初めてだった。齊藤佑樹投手の力投と、鍛え抜かれたチームの堅守・巧打は今さらここで称賛するまでもなかるう。この齊藤投手は群馬県太田市で私どもの浅沼経営センターの地元でもあり、聞くと中学時代の野球少年。夢をもった、力強さに感銘させられました。

お盆様から新規拡大

私は「般若心経」これだけは覚えていて読経ができるのです。宗派に関係なく、仏様に喜ばれるのです。私の習慣はこの一年間、お亡くなりになった顧問先の「経営者または奥さま」の新盆に、8月14・15日のこの暑い中、必ず行くのです。

新盆ですから、きれいに「まつられ」親族、会社関係の人たちは必ずいるのです。「会計事務所の先生が来られた」と知らない人までも、いい気分で対応してくれます。私は亡くなられた社長や奥さまの霊の前で般若心経の読経2分間ぐらいです。必ず親族の人たちが側で座っていてくれます。私

もいい気分です。「いやー、先生が般若心経を父母の、仏様にたむけてくれて本当に有難う。心から感謝いたします」と言われます。

私は、御仏前を今時ですから5千円位入れて行きます。般若心経の読経はビジネスと思えばいいのです。いい宣伝にもなるものです。こんなことがありました。丁度昼時で、お客様が飲食をしていた。会話でうるさいぐらいでした。私は仏様に向かって「おりん」で強くチーン、チーン、チーンと鳴らした。「般若心経」も大きく読経しました。そうしたら、自然と会話等が消えて、おとなしくなったのです。こちらは耳をすましていますから、何か言っているかはわかりません。

「誰だい！あの人はい！」「うちの会計事務所の先生です」「あーそう！どこの会計事務所！」「浅沼経営センターの代表の浅沼さんです」「あーそうー、うちの先生はおやじが亡くなった時には来なかったよ！」「……」「あとで紹介してください…」と耳で聞いてますと、いろいろと聞こえるものです。口コミ、宣伝にはなるものです。

私は若い時から「般若心経」を覚え、お世話になった人がお亡くなりになった時、お線香をあげて、帰るだけでは余りにも能がないのです。親族の方々の眼に悲哀の色が深く漂う時、「読経」をすると悲しみが変わり喜ばれることに変わります。

この新盆でも、40年も続いている。1000人くらいのことがあったと思うのです。私は浅沼経営センターにとって、私のこの姿や態度が新規を呼んでくれる一つであったのです。「亡くなった社長」が何かをささやいてくれているような気になるのです。「知らないところから新規のお客様が」、「あの時に見ましたのでとか」、とくに「相続・事業承継」にかかわる仕事が増え一つの事業部門にもなったのです。仏様への「心をこめて」「手をかけて」「気をかけて」お世話になった感謝をこめて、必ずいいことは起きるのです。亡くなった顧問先の方々に心をこめることにこそ、会計事務所の底力になっていくのかと思います。若い先生方には是非、「般若心経」を覚えていただければ幸いです。

不滅の法灯 - 会社の存続！

私は、8月16日に京都五山の送り火の大文字を見ることができました。いい天気ですわやかな気分、「大」「妙」「法」等々を見ることができました。非常に感動しました。

翌日、比叡山延暦寺、根本中堂を見ることができました。3つの灯明、「不滅の法灯」が1200年という歳月の間、途絶えるこ

となく受け継がれているのです。説明された若いお坊さんが、この3つの灯明のことを言われました。「1つは過去、1つは現在、1つは未来」の「あかり」ですと。

「過去、現在、未来」と聞かれた時に、**決算診断提案書**のことが閃いた。「不滅の灯明」は「決算診断提案書」と同じに思える。社長の経営を振り返ってみる。今がある。そして未来へとつながっていくのです。原因があるから結果がある。歴史を振り返ってみよう。今が大事、未来へのシミュレーションがわかってくるのです。「不滅の灯明」には、意味がそれぞれにあるのかなーと思いました。それは、「企業の存続」のことです。会社にとっての決算こそ「不滅の灯明」かも知れません。

決算こそ、会社にとって重要なことです。社長に「決算診断」を用いて、決算書の「報告・解説」をする。「決算診断」を用いて、経営課題を社長と共に考える。社長が会社の強み、弱みを理解し、経営に役立てていく。そして、経営計画を作られる。**決算こそ、企業の生命線あり、不滅の法灯みたいなものと確信しました。**

比叡山延暦寺根本中堂にある不滅の法灯は、伝教大師最澄が比叡山上に登り延暦寺の前身・一乗止観院を開いたのに始まります。のちに一乗止観院は、根本中堂として延暦寺の本堂として中心的役割をにないます。ときに788年、平安京に都が置かれる6年も前のこととなります。以来、1200年以上にわたって途絶えることなく不滅の法灯として守り続けられてきました。

その間、「法(のり)のともし火」とは、お釈迦様の教えであり、三つの灯明をかがげました。不滅の法灯は、天台宗の寺院に分灯されることもありましたが。860年には山形県の立石寺にも分灯されました。立石寺は「閑さや岩にしみ入る蝉の声」という松尾芭蕉が呼んだ山寺として一般には知られています。立石寺は戦国時代、戦争のために焼失するのですが、あらためて延暦寺の法灯を分けてもらい引き続き法灯を守り続けているそうです。

延暦寺も平穏無事な日々が続いたわけではありません。とくに1571年、織田信長により比叡山焼き討ちされました。このとき山上のお堂はほとんどすべてが破壊され、多くのお坊さんが殺されてしまいました。もちろん根本中堂も跡形もなく焼き尽くされました。

ここで**不滅の法灯の歴史は幕を閉じるところだったのですが、立石寺に分灯してあった法灯の火を分けてもらい不滅の法灯として途絶えることなく守り続けることができたのです。それこそ1200年という長い歳月、容易なことではなかったか**と思います。